

I. 研究開発1年次の概要

1 研究開発の概要

齊藤真子

1 研究開発課題と実施期間

- (1)「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」に資する教育課程の研究開発
-総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発-
- (2)平成15年4月1日から平成17年3月31日まで

2 研究開発の概要

大学と連携した併設型「中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)の実践研究(キャリア形成につながる総合人間科・ソーシャルライフ・選択プロジェクト・新教科群など)の成果をふまえて、発展的な「中高一貫カリキュラム」のあり方についての研究開発を行う。

そして同一キャンパス内にある総合大学の各研究科と連携し、文理融合の「21世紀型教養」を育むことにつながる、新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインについて研究し、21世紀の新しい中等教育のあり方を提案する。

3 研究開発課題設定の理由

少子高齢化と成熟社会を迎えた現代日本の中等教育に必要なものの一つがキャリア教育である。本校の併設型「中高一貫カリキュラム」においては、中等教育におけるキャリア形成の3要素(学びの力・人とのかかわる力・自立の力)をカリキュラムの中に位置づけて新教科を研究開発している。大学と連携して一人ひとりの知的的好奇心と個性的自立を育み、社会や人とのかかわりの中で生き方を学び合う「中高一貫カリキュラム」の発展上に「21世紀型教養」があると考えるからである。

4 研究の目的と仮説等

(1)研究仮説

平成12年度より普通科タイプの併設型中・高一貫校として発足した本校は、総合的な学習やキャリア形成を中心に、中等教育の理念と課題についての実践的な研究を重ねてきた。

その知的的好奇心と創造的・個性的自立を育み、「生き方」を学び合う教育実践の成果をふまえて、発展的な併設型「中高一貫カリキュラム」の研究開発を行う。

「21世紀型教養」は、生きる力と個性的自立を育む「中高一貫カリキュラム」の発展上にある。またその根底にある「学びの力」を身につけさせるために、名古屋大学の大学生・院生をTAとして位置づけ、効率的な運用と授業の中での可能性を追究し、新しい授業のあり方についても研究する。

そして同一キャンパスにある総合大学と連携した、文理融合の「21世紀型教養」を育むことにつながる、新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインについて研究し、21世紀を創る新しい中等教育のあり方について提案する。これは教育発達科学研究科「中等教育研究センター」の組織を通じて、総合大学である名古屋大学の各研究科やセンターとの共同研究として取り組む。

(2)必要となる教育課程の特例

中学では「生きる力」(人間関係能力を学ぶ「ソーシャルライフ」と基礎学力)の育成のために210時間が必要であるが、検討課題である。

(3)研究成果の評価方法

研究発表会における、併設型「中高一貫カリキュラム」の取り組み(キャリア形成につながる総合人間科・ソーシャルライフ・選択プロジェクト・新教科群など)についての総合的な評価と課題の検討をふまえて、大学と連携して取り組む本校の授業実践の成果を『新しい中等教育へのメッセージともに学びをつくる』(黎明書房)として出版した。知的的好奇心と生きる力を育み個性的な生徒達の学びの姿を紹介することで多くの人々からの評価を確かめる。生徒・保護者・教員などへ授業についてのアンケート調査を実施し、大学と連携した「中高一貫カリキュラム」のあり方を検証し改善する。

つぎに、シンポジウムや学力調査などにより、大学の求める「知」と中・高校生の学力について検討する。また文理融合の「21世紀型教養」を育む教科や授業を実施し、そのあり方を報告書にまとめる。

さらに、6年間の中高一貫教育を受けた生徒には、併設型中高一貫校における新しい中高大連携教育のあり方について、全体的なアンケート調査を実施しその評価をまとめる。

研究発表会による研究成果の公表と研究協議を通じて新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュ

ラムデザインへの提言を報告書にまとめる。

5 研究計画

<p>当該年次 (第一年次)</p>	<p>1 「青年期のキャリア形成」の視点からの「併設型中高一貫カリキュラム」(1-2-2-1制)の実践の総合的な評価と課題の整理</p> <p>2 文理融合の「21世紀型教養」についての意識調査と生徒の実態把握 大学の求める「知」の内容と中・高校生の学力について、その現状を本教育学部とともに調査研究し教育学的見地からの実態把握をする。 「21世紀型教養」の基礎として求められている「学力」を「8つの学力」と「2つの基礎力」と定義して、全ての教科・学校行事等に関連させてアンケートを実施した。「8つの学力」とは、「理解する力」「表現する力」「思考する力」「情報や知識をやりとりする力」「自分を知る力」「人や社会と関わる力」「問題を設定する力」「問題を解決する力」とした。また、「2つの基礎力」は、「基礎力1(知識・技能)」「基礎力2(感性・好奇心)」と定義した。</p> <p>①「知的な好奇心」「個性的自立」「中・高校生の確かな学力」の視点から研究者と問題点の検討 ②総合大学との連携のあり方についての課題の検討 ③シンポジウムによる意見交換を通じての批判・検討</p> <p>3 名古屋大学との連携による新しい「教科のあり方」についての研究 ①名古屋大学の各研究科(理・工・環境・医・農・多元数理・法・経・文・教・国際開発など)やセンター(留学生・保体)とともに「新しい教科」の授業展開と成績評価についての検討 ②学年課題と年間指導計画案の作成</p> <p>4 併設型中高一貫カリキュラム(1-2-2-1制)を発展させた中等教育と高等教育をつなぐ「中・高・大連携カリキュラム」の作成</p>
<p>第二年次</p>	<p>1 文理融合の「21世紀型教養」を育む教科や授業の実施と評価 ①文理融合の21世紀型教養を育む教科の系統性とその評価 ②名古屋大学の研究者、院生、留学生の参加による「新しい教科」の実施 ③中・高校生の名古屋大学の授業等への参加と成績評価のあり方 ④「学力アンケート」の実施。「8つの学力」と「2つの基礎力」について各教科・総合人間科・新教科・行事等における機能の検討</p> <p>2 「中・高・大連携カリキュラム」の試行と中高大の連携を生かした実践 ①TTや少人数教育による一人ひとりの「確かな学びの力」を伸ばす併設型中高一貫カリキュラムにおける全教科の再編成 ②大学連携講座「学びの杜」の実施による「知的な好奇心」の育成(中・高・保護者・地域の方の参加)</p> <p>3 生徒の変容を具体的に把握し成果と問題点を明らかにする。</p> <p>4 多様な学習方法を試みることで指導方法の改善を図る。</p> <p>5 第3年次に向けて研究成果のまとめの作業に着手する。</p>
<p>第三年次</p>	<p>1 併設型中高一貫校における「中・高・大連携カリキュラム」全般の反省と総括 ①研究内容全般の評価 ②生徒からみた「中・高・大連携カリキュラム」の問題点の整理</p>

	③研究発表会による研究成果の公表と研究協議を通じての批判・検討 2 併設型中高一貫校における新しい中高大連携教育のあり方 ①新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインへの提言 ②中高大連携教育のあり方を報告書にまとめる。
--	---

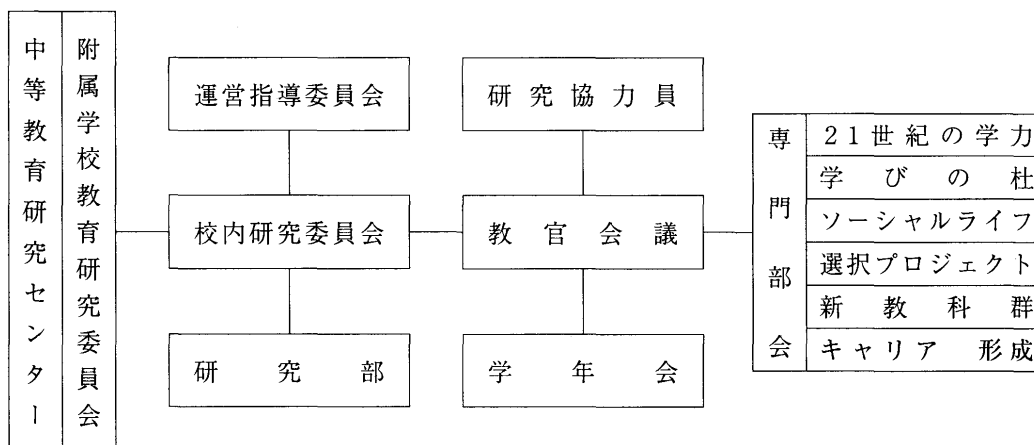
6 年次評価計画

当該年次 (第一年次)	研究発表会 (04/2/13) において、併設型「中高一貫カリキュラム」の実践的な取り組みの総合的な評価と課題について研究協議をした。そして本校の取り組みの実践内容をまとめた『新しい中等教育へのメッセージともに学びをつくるー』(黎明書房)を出版した。生徒・保護者・教員などへのアンケート調査により、大学と連携した中高一貫カリキュラムを検証した。またシンポジウムや学力調査などにより大学の求める「知」と中・高校生の学力について検討した。本校の学力に関しての評価について、「8つの力」と各教科の学力と対応するように検討を行った。学力アンケートにおいては、「8つの力」と「2つの基礎力」と対応した質問紙を作成して実施した。
第二年次	中1～高3の生徒・保護者と教員などへのアンケート調査により、大学と連携した中高一貫カリキュラムを評価する。「21世紀型教養」を育む教科や授業を実施しそのあり方を報告書にまとめる。
第三年次	総合的なアンケート調査を実施し併設型中高一貫校における新しい中高大連携教育のあり方についてまとめる。研究発表会による研究成果の公表と研究協議を通じて新しい教科・科目構成をはじめとするカリキュラムデザインへの提言を報告書にまとめる。

7 研究組織の概要

(1)研究体制

校長・運営委員・研究主任・研究部員及び選出委員によって構成される教育研究委員会により、教育研究開発の推進を行う。



研究開発の概要

(2)運営指導委員

氏名	勤務先	職名	備考(専門分野)
大谷 尚	名古屋大学	教育学部教授	教育情報学
吉田俊和	〃	教育学部教授	社会行動学
的場正美	〃	教育学部教授	教育方法学
寺田盛紀	〃	教育学部教授	技術職業教育学
田中宣秀	〃	教育学部教授	人材開発科学
植田健男	〃	教育学部教授	教育経営学
金井篤子	〃	教育学部助教授	発達援助臨床学
平石賢二	〃	教育学部助教授	発達援助心理学
松下晴彦	〃	教育学部助教授	人間形成学
池内 了	〃	理学部教授	天体物理学
若尾祐司	〃	文学部教授	西洋史学
根本二郎	〃	経済学部助教授	計量経済学
坂柳恒夫	愛知教育大学	教育学部教授	職業指導論
小嶋秀夫	京都学園大学	人間文化学部教授	生涯発達心理学
高羽国広	石川テレビ	社長	一般の有識者
桜井正一	愛知県立中村高校	校長	教育者
橋本松代	名古屋市立見付小	校長	教育者
小川克郎	元名古屋大学	名誉教授	学識経験者
高田勇夫	歯科医師		一般の有識者

8 教育課程

教育課程表 (平成15年度)

中学

		中学1年	中学2年	中学3年
		年間授業時数	年間授業時数	年間授業時数
必修教科	国語	140	105	140 (+35)
	社会	105	105	105 (+20)
	数学	140 (+35)	105	105
	理科	105	105	105 (+25)
	音楽	35 (-10)	52.5 (+17.5)	35
	美術	35 (-10)	52.5 (+17.5)	35
	保健体育	105 (+15)	70 (-20)	70 (-20)
	技術家庭	70	70	70 (+35)
	英語	140 (+35)	105	105
ヒューマンプログラム	道徳	35	35	35
	特別活動・学級活動	35	35	35
	ソーシャルライフ (保体)	35 (+35)	35 (+35)	35 (+35)
総合的な学習の時間	総合人間科Ⅰ	70 (-30)	70	70 (-60)
	生き方を探るⅠ			
	生命と環境Ⅰ			
選択教科	平和と国際理解Ⅰ			
	基礎英語		35	35
	基礎数学		35	35
	選択プロジェクト		35 (+20)	35
合計		1050 (+70)	1050 (+70)	1050 (+70)

ソーシャルライフ は、社会的な対人関係能力を学ぶ新しい授業

選択プロジェクトは、2・3年の異学年小クラスによる展開 (9教科11講座)

高校 ※半期で0.5単位、2年間で全講座履修

教科	科目	第1学年	第2学年		第3学年	
			共通	選択	共通	選択
国語	国語総合	4				
	現代文		2	2		
	古典Ⅰ		2	2		
	古典講読			2□		
	国語表現					2□
地理歴史	世界史A・B	2			4◆④	2○②
	日本史A・B		2◎		4◆	2○
	地理A・B		2◎	2□	4◆	2○
公民	現代社会 (倫理・政治経済)		2	4◆		2○
数学	数学Ⅰ	3				
	数学A	2	1			2◇△
	数学Ⅱ		3			
	数学B			2■		2□
	数学Ⅲ					3■
理科	理科総合A	2				2□
	化学ⅠB		2●	2□	2*	2◇
	生物ⅠB		2●	2□	2*	2◇
	物理ⅠB		2●	2□	2*②	2◇
	地学ⅠB		2●	2□	2*	2◇
	化学ⅠB研究					2△
	生物ⅠB研究					2△
	物理ⅠB研究					2△
	地学ⅠB研究					2△
	化学Ⅱ					2○
	生物Ⅱ					2○
	物理Ⅱ					2○②
	地学Ⅱ					2○
	保健体育	体育(ソーシャル)	3	2		2
保健		2				
スポーツ理論						3■
芸術	音楽Ⅰ	2○				
	美術Ⅰ	2○				
	書道Ⅰ	2○				
	音楽Ⅱ			2■		2
	美術Ⅱ			2■		2
	音楽Ⅲ					2◇
英語	英語Ⅰ	3				
	オーラルⅠ	2	1			
	英語Ⅱ		4		1	
	リーディング				4	
	総合英語Ⅰ1			2□		
	総合英語Ⅰ2			2■		
	総合英語Ⅱ1					2◇
	総合英語Ⅱ2					2△
	総合英語Ⅱ3					2○
	総合英語Ⅱ4					2□
家庭	家庭基礎 生活と技術	1	2	2■		2□④
情報	情報B	1				
新教科群	心と身体の科学 自然と科学	※1				
	国際コミュニケーション学 共生と平和の科学		※1			
総合的な学習 の時間	総合人間科Ⅱ 生命と環境Ⅱ 平和と国際理解Ⅱ 生き方を探るⅡ	1	1		1	
ヒューマンプログラム	ソーシャルライフ ホームルーム	(1) 1	1		1	
計		30	26	4	19	11
合計		30	30		30	

9 具体的研究事項

(1)21世紀の学力について

文理融合の「21世紀型教養」の基礎として求められている「学力」を「8つの学力」と「2つの基礎力」と定義して、全ての教科・学校行事等に関連させてアンケートを実施した。「8つの学力」とは、「理解する力」「表現する力」「思考する力」「情報や知識をやりとりする力」「自分を知る力」「人や社会と関わる力」「問題を設定する力」「問題を解決する力」とした。また、「2つの基礎力」は、「基礎力1(知識・技能)」「基礎力2(感性・好奇心)」と定義した。中等教育の場でどのようにして「21世紀に求められる学力」を付けさせたらよいかを、アンケートを基に考察する。

(2)青年期のキャリア形成について

14年度に本校で実施された金井篤子先生(本学教育発達科学研究科)の青年期のキャリア形成についてのアンケートの調査結果を基に、中高6カ年において一人ひとりの生徒がどのようにキャリア意識を形成していくかについて、本校での総合人間科、新教科群などの取り組みや進路指導との関わりから具体的に探る。

(3)人間関係構築スキルを教室で学ぶソーシャルライフについて

大学研究者と共同で「心の教育」をカリキュラムに配置し、授業として実施して4年目を迎える今後の「心の教育」=「ソーシャルライフ」の展開と発展の可能性について考察する。

(4)中学における必修教科と選択教科(選択プロジェクト)について

3年目を迎える中学2年生と三年生の異年齢少数選択授業「選択プロジェクト」の実践を基に、中高一貫カリキュラムのキャリア形成の中での必修教科と選択授業の位置づけや、教科における選択の意味、異年齢集団等の授業実践の課題等について考察する。

(5)高校における教科の未来について

高校1年生	「心と身体の科学」(前期)	「自然と科学」(後期)
高校2年生	「国際コミュニケーション学」(前期)	「共生と平和の科学」(後期)

高校における新しい教科のあり方について、「新教科群」の実践を基に、大学教員、高校教員、生徒の三者の立場からの新しい教科の可能性と今後の展望を、日本(世界)の教育環境の変化を視野に入れながら幅広い観点から考察する。

10研究開発の成果

(1)実施による効果

①研究協議会の実施により、授業方法や実践課題などについて、併設型「中高一貫カリキュラム」のさまざまな実践的な取り組み内容における本校教員の力量を高めることができた。

②総合大学との連携をいかして取り組む本校の教育実践の内容をまとめた『新しい中等教育へのメッセージーともに学びをつくるー』(黎明書房)を出版することができた。

③「21世紀の学力」を定義するとともに、生徒・保護者・教員などへアンケート調査を実施してデータを蓄積し、分析と考察をすることができた。

④「併設型中高一貫カリキュラム」の中に、キャリア形成を位置づけて研究し、6年一貫のキャリア教育についての研究をよりすすめることができた。

(2)実施上の問題点と今後の課題

①「併設型中高一貫カリキュラム」の実践研究をもとに、中・高6カ年一貫の「キャリア教育」のより発展的なあり方については、大学と連携して実践研究を継続する必要がある。

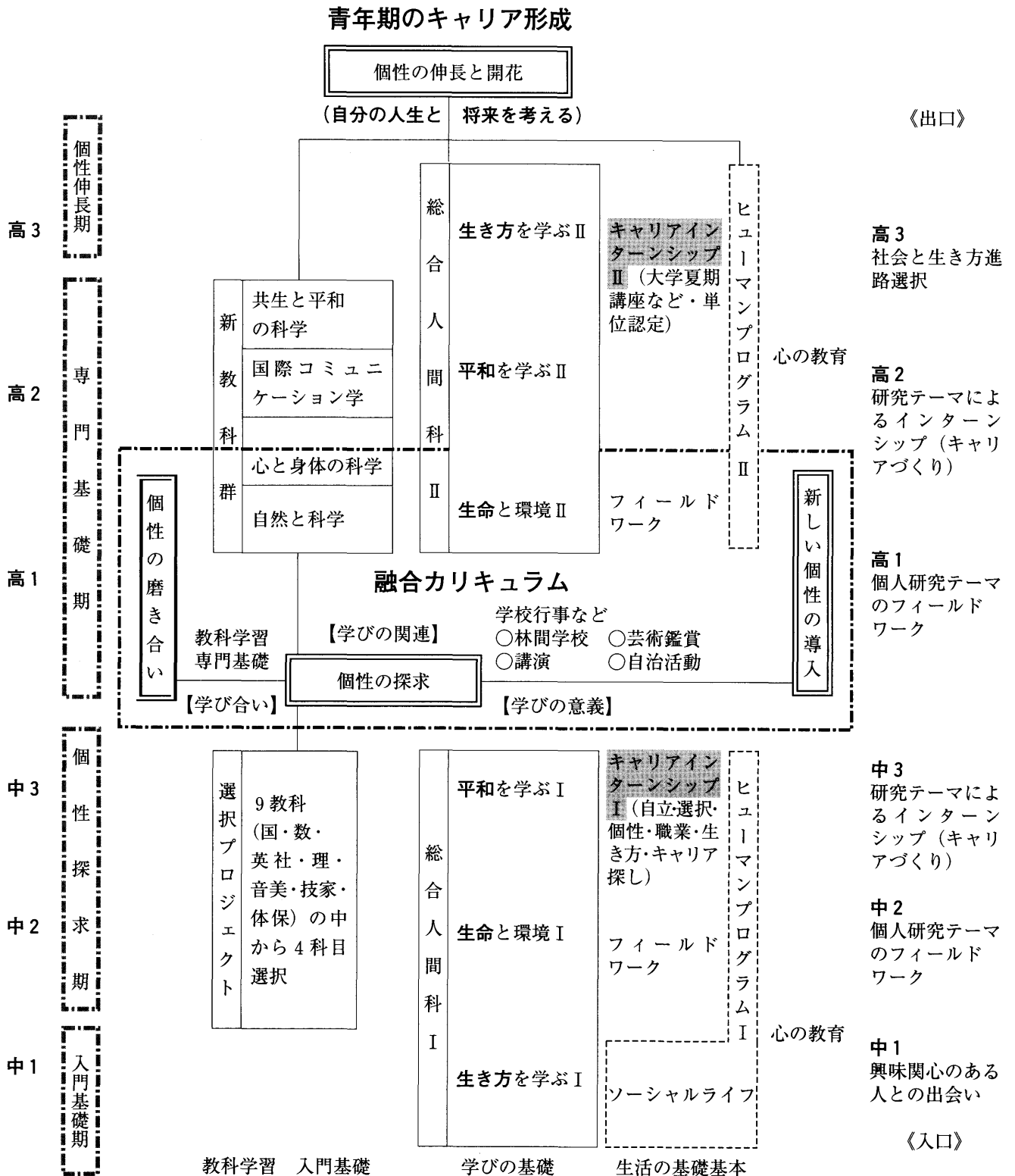
②生徒・保護者と教員などへの「学力アンケート」を引き続き実施し、「8つの学力」と「2つの基礎力」の各項目による評価を試みる。データの蓄積と分析においては各教科との関連をより明確にしていかななくてはならない。

③高校段階における「新教科群」の一般化に向けての取り組みについては、テキストづくりが急務である。テキスト作りに取り組むことで、内容と指導方法を改善していく必要がある。

④中・高校生と保護者を対象として、大学の最先端の研究内容を分かりやすく学ぶ「学びの杜」講座の単位化に向けて授業内容を検証し評価していく必要がある。また「中高大一貫教育」の向けての運営方法の問題点についても検討していかななくてはならない。

資料 併設型中高一貫校におけるキャリア教育

個性的自立とキャリアを育む併設型中高一貫教育課程 (1-2-2-1制) の構造図



キャリア教育 (総合人間科 進路)

キャリアインターンシップI

個性探求期 (中2・3)

(自立・選択プロジェクト・個性・職業・生き方・キャリア探し) 事前指導 2日間 (夏休み) 事後指導

キャリアインターンシップII

専門基礎期 (高1・2) 単位化 進路 大学連携

(自立・新教科群・個性・進路 職業・生き方・キャリアづくり) 事前指導 4日間 (夏休み) 事後指導